



「都内の美術館」をたずねて

「美術研修」

2022年10月12日

講師：美術研究家 沼辺 信一

3年ぶりに美術鑑賞研修会を開催し、アーティゾン美術館を訪れました。

福岡県久留米にルーツがある、幼なじみの青木繁と坂本繁二郎の作品展と
同時開催の石橋財団コレクション選「田園、家族、都市」を鑑賞しました。

■アーティゾン美術館
生誕140年 ふたつの旅
青木繁×坂本繁二郎

■アーティゾン美術館

公益財団法人石橋財団ブリヂストン美術館は、ブリヂストンタイヤの創業者 石橋正二郎の美術コレクションを展示するため1952年に開館しました。2015年から5年間の休館を経て、アーティゾン美術館として生まれ変わりました。アートとホライゾン（地平）の造語で、時代を切り拓くアートの地平を多くの方に感じ取っていただきたいとのコンセプトです。同美術館には、レンブラント、ルノワールやモネをはじめ、他にも世界的に価値ある名作が多く所蔵されています。

■青木繁

青木繁は、東京美術学校在学中に誰も描いたことのない日本神話に題材を得た作品群でデビューします。そして「海の幸」（重要文化財）で早熟な天才ぶりを発揮し、画壇を驚かせました。

青木繁は、卒業後に坂本繁二郎らと千葉県館山の布良（めら）海岸に滞在しました。坂本繁二郎が目にした大漁の光景に想像力をかきたてられ、「海の幸」を描き上げました。それは、青木繁本人が見た光景ではなく想像力で描かれたもので、大胆な画面を生み出しました。また、漁師のなかに恋人である福田たねと思われる女性が描かれています。

「わだつみのいるこの宮」（重要文化財）は、兄の海幸彦から借りた釣針を探しに海底に降りた山幸彦が海神の宮殿の井戸でその娘の豊玉姫に出逢います。二人は結婚し、生まれた息子は天皇家の祖となった神話を描いたものです。左下の足元から泡が湧いており、海の中であることが表現されています。夏目漱石は、小説『それから』のなかで「いい氣持」の絵と称賛した絵画です。

1907年の久留米へ帰郷後はふるわず、28歳の若さでこの世を去りました。まさに

短距離ランナーのごとく走り去ってしまった作家でした。

■坂本繁二郎

坂本繁二郎は、1902年、青木繁に誘われ上京、不同舎と太平洋画会研究所に学びました。青木没後は、遺作展と画集刊行に奔走しました。

坂本繁二郎は、農村や動物といった原風景を多く描いています。その後、フランスへ留学しますが、パリ市内だけではなく、ブルターニュ地方などの郊外を旅したところが坂本繁二郎ならではのところです。留學を機に、作風が大きく変わります。水色や桜色のような中間色を使い、馬の目や影を実物とは異なる色で表現するようになりました。帰国後、郷里の久留米に戻り、馬や牛を好んで描き、柿や栗、能面など身の回りの品々を繰り返し取り上げました。晩年には空中に浮かぶ満月を描いています。

坂本繁二郎は、青木繁の作品「海の幸」が重要文化財になったのを見届けて、87歳でこの世を去りました。それは偶然なのでしょう。短命であった青木繁とは正反対な、長距離ランナーのような作家でした。

当財団の美術鑑賞研修会は、40年前に旧ブリヂストン美術館から始まりました。コロナ禍で休止してきた研修会の再開が同美術館鑑賞となり、その巡り合わせに感慨深いものを感じました。

事前に別会場にて、沼辺信一氏からスライドを用いたレクチャーを受けてからの鑑賞となりました。沼辺氏の解説は、作品の評だけでなく、作家の作風変化や対照的な人生までを交えたものでした。絵を鑑賞する感動が二倍にも三倍にも上がったように感じました。次回研修会の期待も膨らみます。



4



3



2



1



5



6



7

1 解説する沼辺信一氏 2 研修会場 3 青木繁《海の幸》1904年 重要文化財 漁師の中に女性が…(右から4人目) 4 青木繁《わだつみのいるこの宮》1907年 重要文化財 5 坂本繁二郎《帽子を持てる女》1923年 6 坂本繁二郎《放牧三馬》1932年 7 アーティゾン美術館外観
上記 3～6の所蔵元 石橋財団アーティゾン美術館蔵